

『萬葉集略解』の宣長説

堀 野 理 香

近代に至るまで萬葉研究者に多大な影響を及ぼした『萬葉集略解』（以下、『略解』と称す）は加藤千蔭によって著された。『略解』の奥書には、

此萬葉集略解すべて三十卷、寛政三年二月十日より筆を起こして、同八年八月十七日に稿成れり。さてあまたたび考へ正して、同十二月正月十日までに、みづから書き畢りぬ。

とある。加藤千蔭は、十歳にして賀茂眞淵の門弟となり、国学などを学んだ。江戸町奉行所与力を務めていた千蔭は、天明八年（一七八八）退職後、『萬葉集』の研究を深めてゆき、奥書にあるように、寛政三年（一七九一）執筆を開始した。

一方、宣長は、宝暦十一年（一七六一）五月から開始した『萬葉集』の数度にわたる会説・講釈が寛政七年（一七九五）六月に終了している。また、「畢生の大業」といふべき『古事記伝』（以下、

『記伝』と称す）は、寛政十年六月までに浄書を終えている。

この両者は、千蔭が宛てた一通の書簡によって親交を深めてゆく。此四とせさきに、千蔭やまひによりてつかへをしぞき侍しより、おふけなく、うしのこゝろさしを繼てむと思起しつゝ、萬葉考をくり返し見侍るに、うし、こゝらのとし月つとめたまへりし眞心は、おほろけならぬものから、齡の末に至ては、いかにぞや、しひごとによとおぼしき事どもまじらひ侍りて、巻のついでなどかうかがへられしは、いとことわりある事ながら、はやく今のついでに成ぬるとみえ侍るを、わたくしに改べきならずおぼえ侍れば、今の本のまゝにて、つばらなる事は考にゆづりて、あら／＼かいつめ見侍つれど、なほたど／＼しき事のみぞおほかる。さるたづきありて、玉のを琴てふ書もとめ出つゝ見侍るに、こゑきゝしらむきはに侍らぬものから、まことにおよびがてなるしらべになむおぼえ侍る。そが中には、千蔭がをちなき心に、とあらんかゝらむと思ひめぐらしと、また

くひとしきことしもまれく侍りて、よろこほひにたへずなむ侍る。されば君のみ名をあらはし書つくおぼえ侍る也。⁽¹⁾

この書を送ったのは、寛政三年、宣長六十二歳、千蔭五十七歳の時であつた。これを受け取った宣長は、翌年一月に返書を出した。

宣長は、かひなきよはひ六十にあまり侍れど、いまだ家のなりをも、えゆづりあへ侍らで、よなか暁といはず、はしりありき侍るに、ものまなぶいとまもすくなく、こしいたくくるしく侍るに、いとなむうらやましく思ひ給へらるゝ、まことや大人の萬葉考、かきつぎ給はむとや、そはよろづよりもめでたく、たふとき御事、同じ心に、いと／うれしくなむ思ひ給ふる、巻のついでのこと、のりながが思ひ侍るも、のたまはすると、もはら同じことになむ侍る、そも／大人の御しわざを、とかくもどき侍るは、いともかしこくは侍れど、ざりとていかにぞやおぼゆるふしを、さて過ぎむは、中々にかの教のころにも、たがひてぞ侍らまし、よろづはつぎ／にあきらかなりゆかむこそ學びの道のほいには侍らめ、おのがころにも、たがひてぞ侍りつる、玉の小琴という物、見給へるよし、もとよりいたりすくなきしわざは、御らんじどころも侍るまじきは、さるものにて、人の心は、いにしへのものこそし人もいひけるやうに、おもてのごとく。⁽²⁾

『略解』の草稿を実際、宣長に示したのは、この二年後、寛政六年で、その後寛政十一年十月まで、『略解』の書き入れは、絶え間無く続いた。

前述の如く、宣長は、この頃『記伝』の完成などによつて、研鑽を積んできている。明和元年（一七六四）に着手してから、寛政十年（一七九八）まで三五年を要した『記伝』の中で、当然、自説が変化したものもあるであらう。

また、『略解』に宣長が書き入れをしていた頃、稻垣大平との問答『萬葉集東歌僻説評』（寛政九年）、野井安定との問答、『萬葉集答問』が同時進行しており、これらの作業からも宣長自身が知り得たものもあつたであらう。これらは、『略解』にどのように影響したのであろうか。

二

『記伝』に引用された『萬葉集』に関する注と『略解』所引の宣長説とで見解の相違が見られるものが存する。それらを以下に挙げる。

（1）君家爾 吾住坂乃 家道平毛 吾者不忘 命不死者

（卷四 五〇四）

宣長は、この歌の第二句を、どのように解釈していたのだろうか。柴田常昭との問答『萬葉集疑問』⁽³⁾（以下、『疑問』と称す）では、

男女ノ間ニスムト云ハ、通フ事也、君力家ニカヨフト云意也、サテ住坂ト云地名ニ云ヒカケタリ、コノ歌、家路ヲモト云ルヲ思ヘハ、人丸ノ死タル後ニヨメル歟、君力家ニワガカヨヒスミシソノ路ヲモ、生涯ヲスレジト也

と宣長は答えている。住坂を地名に、また、それが掛詞になっていると考えている。『記伝』二十三之巻でも住坂を地名と考え、更に詳しい説明をしている。

此坂は宇陀郡の何処ばかりに在^ぞと云に、或説に、萩原^{はぎはら}駅の西にありと云る、右の古書どもの趣、常に人の往来せし大道と聞^{きこ}ゆれば、まことにさもあるべし「萩原は、今も長谷より伊賀へ越る大道にて、其西方は長谷まで、山中にて坂路なり」

『略解』所引の宣長説では、

此歌君が家ニ吾と言ふ意は、唯だ住と言はん序のみか、又は坂は誤字ならんか、かにかくに宇陀の墨坂とは思はれず、彼地は大和の東の邊地にて、京人の常に通ふべき所には有らず

と『記伝』での説を撤回し、住坂の坂は誤字であるとしている。その根拠は、宇陀の墨坂の人々が行きかう道ではない、ということからである。『記伝』で引用されていた或説が誰の説であるかは、今のところ判明していないが、その説を否定するとともに誤字説を『略解』に提示したことが判明する。

次に、今日まで萬葉学者が難解としてきた語について、宣長がどのような考えを持っていたかがわかるものを紹介する。

(2) 棹四香能 芽二貫置有 露之白珠 相佐和仁 誰人可毛 手
爾將巻知布 (巻八 一五四七)

『萬葉集問目』(以下、『問目』と称す)で宣長は、「相佐和仁トハ、イカナル意ニカ侍ラン」と質問をし、それに対し眞淵は、「此

言、いまた意得ず、」と返答した。

また『萬葉問聞抄』(以下、『問聞抄』と称す)では、「相佐和仁、この詞、打つけにといふ意也と魚彦説り、可然や、問奉る」と、樗取魚彦の説を借り、道麻呂が宣長に尋ねた。宣長の返答は、次のようなものであった。

ウチツケニと解ことその由ありや、由なくてはみたり言也、相は猶の誤にて、和は利の誤、ナホサリニにはあらしか、思召いか、此考の可否うけたまはりたくこそ、猶佐利の考、又後に考てわろしといへり

宣長は、相佐和仁をナホザリニという意味と考えたが、すぐに自らそれを否定していることがこの記述からわかる。この書簡が交されたのは安永六年(一七七七)のことである。

その後、寛政七年(一七九五)頃に書き入れられた『略解』所引の宣長説は、

物語ぶみにオホザフと言ふ詞有り。是れ此アフサワの訛れるにて、其オホザフと言へる詞の意とアフサワと全く同じと言へり。

となっている。この『略解』で言っている物語というのは、『源氏物語』であり、宣長の研究書『源氏物語玉の小櫛』に「おほぞうなる」の注釈がある。

此言は、萬葉にあふさわといふ言ある、それと意同じく聞ゆれば、もとはあふさわなりけんを、さわを、例の音便にさうといひ、つひにあふをも、おほと書きなしたるなるべし、音便にい

ふこと多く、又假字づかひのみだりがはしくなれるより、かゝるたぐひおほし、

この記事によつて、『略解』の宣長説に至つた過程が判明する。しかし、アフサワの意味は、明確になつていない。

成立年代から現時点で宣長の最終的な説と考えられるのは、寛政九年頃に野井安定と交わした『萬葉集答問』であり、そこでは、同様の質問に宣長は「ナホザリニ也」と『問聞抄』の中で自ら否定した説に戻つてゐることが判明する。

では、本文批判による説の変遷を次に挙げる。

(3) 檀越也 然勿言 氏戸等我 課役徴者 汝毛半甘

(巻一六 三八四七)

この歌の三句目、氏戸等を『問聞抄』では、「テコトモは妻や妾や也」と宣長が答えており、テコトモと訓んでいたことがわかる。

『記伝』三十五之巻を見ると、「氏戸は、誤字と見えたり」と、この歌を挙げ、注を加えている。しかし、誤字であるとしただけであつた案は挙げられていない。そこで『略解』を見ると次のようにある。

氏戸は、戸長の誤か

『問聞抄』が安永六年(一七七七)、『記伝』三十五之巻が寛政五年(一七九三)に書かれた。宣長による『略解』巻十六の書入は寛政十年(一七九八)頃とみられる。このことから、『略解』の宣長説を最終的な説と見ることができよう。

次に眞淵説を支持してゐた宣長が最終的に自説を展開していった例を紹介する。

(4) 玉梓之 道爾出立 往吾者 公之事跡乎 負而之將去

(巻一九 四二五二)

この歌の第四句、キミガコトドヲという部分のコトドが問題になつてゐる。

『記伝』六之巻に、

この歌家持、卿越中、國より京に上^ル時、錢^{ツツ}せし人に報^{コト}し、別の歌なれば、此も事跡とは、離別の辭^{ハナレノコト}を云て、其を忘れず心に持てゆかむと讀めるにや、若然らば、此の事^{コト}戸と同じ言にやあらむ、但し此歌師説には、事跡は即ち字の如くにて、志和邪と訓べし、この錢^{ツツ}せし人は、國の次官^{ツツ}なれば、公が國にての政務の事跡^{ツツ}を京へ持ゆきて、申^{ツツ}上^{ツツ}むとよめるなりとありとある。コトドを離別の言葉と眞淵説の業績という考えの両方を擧げてゐる。ここからは宣長がどのように考へていたか、はつきりしない。

『問聞抄』では、「公之事跡、いかなる詞にや」といふ道麻呂の質問に、

コトドは、事跡の字のことく、公が政務の事跡也、政務の事跡をことく記しつけて、それを負持て行んといふ事也、公は繩磨をさす

と宣長は答え、眞淵説を認めてゐることが判明する。

『略解』所引の宣長説には、

古事記神代、各對立而度事戸之時と言ふは、夫婦の交を絶つ證の事と思はる。此歌家持卿越中國より京に上る時、錢せし人に

報いし別の歌なれば、是れも事跡は離別の辭を言ひて、是れを忘れず心に持ちて行かんと詠めるにやと書かれている。

以上のことから、宣長は眞淵と同様に、事跡を政務の業績と考えたが、『略解』では、古事記を傍証とし、『記伝』で述べた自説、つまり事跡を離別の言葉として考えた。このようにして、宣長説の変遷を迎えることができる。

前述のように、宣長説の変遷を見てきたのだが、他にも『略解』とそれ以前では説が異なっている、というものが数例ある。後に付した一覽表に○印をつけておいたので、参考にしていただきたい。

三

前章では、宣長自身による説の変遷を見てきたが、ここでは、門人から影響を受け、それが『略解』に書き入れられたものについて述べていきたい。

安平爾與之 奈良爾安流伊毛我 多可多可爾 麻都良牟許己呂之可爾波安良司可
(卷十八 四一〇七)

この歌の結句について『略解』には、「司は自の誤か」と宣長説がある。『問聞抄』にはこのような本文批判の姿勢は見られない。

しかし、『石塚龍麿疑問』の石塚龍麿の意見に

司ハ自ノ誤リナルヘシ、司ハ十卷ニ一處清音ニ用ヒタリ

とある。これに対し宣長はこの意見を肯定している。

『略解』所引の宣長説は、恰も宣長自身の説のように見受けられ

るが、『石塚龍麿疑問』の淨書の時期(一七九一)から判断しても、この説は、石塚龍麿の説であると思われる。

石塚龍麿は、『古言清濁考』を著し、まさにこの注は彼が本領を発揮したものと言える。同様にして、石塚龍麿の意見が影響しているものがある。

天雲乎 富呂爾布美安多之 鳴神毛 今日爾益而 可之古家米也母
(卷十九 四三三五)

この歌の第二句は、宣長が難解としていたものの一つである。そのホロニフミアタシのフミアタシについて宣長は、『問目』の中で、「フミアタシハ、アラシノ意ニヤ」と師である眞淵に書き送った。眞淵は、この考えに対して肯定も否定もしていない。

『問聞抄』では、田中道麻呂の同様の質問に、宣長は自説である「荒し」ではないかと返答している。しかし、『略解』には、次のような宣長説が引用されている。

宣長云アタシは散らす意なり、

アタシという言葉の意味が、「荒し」という解釈から「散らす」というものに変化している。

このことは、『石塚龍麿疑問』を見ると明らかとなる。

安多之ノ安ハワト通ヒテ、渡ノ意歟、又あ太しト讀テ異意歟、上ニホロトアレバ、ホロノニ雲をフミクダク事ニヤ

これに対し宣長の返答は、

フミアダシハ、御考ヘノ如クフミチラシフミクダクヤウノ意ト聞ユ

とあり、石塚龍麿の二つの意見の一方を肯定している。これが、『略解』に取り上げられたのである。

では、宣長とその門人によって説かれたものを挙げる。

在根良 對馬乃渡 渡中爾 幣取向而 早還許年

(卷一 六二)

第一句目、在根良が問題となっている。『略解』の中で宣長は、「在根良」は「布根竟」の誤字であることを示している。

『記伝』四十二之巻では、阿理袁という言葉を説明する中で、この歌が引かれている。

契沖云、在尾上之なり、萬葉第一云、在根良 對馬乃渡、云

云、此在根と阿理鳴と同じ意なるべきか、在て久しき嶺、在て久しき尾にや、と云るは非なり、萬葉の在根良は、字の誤なり、そのうへ在とのみ云て、在て久しき意とせむいかゞ又たとひ其意にもあれ、在て久しきと云こと何のためぞや、

宣長は、契沖説を否定し、在根良は誤字であるとした。しかし、代案は何も示されていない。それについては、『萬葉集玉の小琴』⁽⁸⁾に在は布の誤にて、布根也、良は、稻掛大平が考へに、竟の誤なるべしといへり、されば此枕詞は、舟泊るといふこと也、泊を竟と書ること、他巻に例あり、

と書かれている。『略解』の中では、布根竟と示されていたが、訓み方が書かれていなかった。この記述から、布根意をフネハツルと訓むことがわかる。

以上のことから、在の誤が布であることは宣長の考えだが、良が

竟であると考へたのは稻掛大平であったということが判明する。

今日においても場所が定まっていない地を宣長はどのように考えていったかがわかるものを次に紹介する。

大汝 少彦名乃 將座 志都乃石室者 幾代將經

(卷三 三五五)

志都の石室は、どこにあるのだろうか。いくつかの地名が宣長の著書・問答に示唆されているので列挙する。

一、播磨国 (萬葉問聞抄の宣長の答え 安永七年荒木田尚賢宛書簡)

二、播磨国、石ノ宝殿 (萬葉集疑問 柴田常昭の考え)

三、石見国 (玉勝間・略解宣長説)

この三つの地名が示されていたわけであるが、初め宣長は、この地がどこであるのかを規定する方法として、

皮為酢寸 久米能若子我 伊座家留 三穂乃岩屋者 雖見不飽

この巻三 三〇七番の歌と三五五番歌は下句が入れ違いになっているのだからと考へた。そのことは、『記伝』十二之巻や『萬葉集玉の小琴』でも指摘している。『問聞抄』は、この下句の入れ違いを前提にして、

志都の岩屋播磨に有、顯宗天皇播磨にまし／＼て、石室中にかくれ入給ひし事、書紀に見え、又、生石村主はまりまの岩屋によしある事也、

と田中道麻呂に答えた。

同じ播磨国の石ノ宝殿ではないか、と柴田常昭は考えたが、宣長はこの説を否定した。『疑問』の中には、この説の否定理由が述べられていないが、『記伝』四十之巻では、「彼は人の入居るべき物のさまにはあらず」と否定の根拠が示されている。

石見国邑知郡にある岩屋が、志都の石室であるということは、『玉勝間』（石見国なる志都の岩屋）と『略解』に書かれている。しかし、この両書間には、微妙な違いがある。『玉勝間』では、まだこの歌に詠まれている志都の岩屋と同一であるのか決めかねているのである。というのは、石見国が官人でもない限り、他国の人が行くことは稀であるし、山深いので、世間の人がこの地を知っていて、歌に詠むような所ではない。このような事情を考えてみると、この地の存在することの信憑性は認めるが、志都の石室がこれである、とはにわかに考えにくい。『玉勝間』では、このような慎重な態度であったが、『略解』では、

石見國邑知郡の山中に岩屋村と言ふ有りて、其山をしづの岩屋といひて甚だ大なる窟あり、高さ三十五六間ばかり、内甚だ広し、里人の言伝へに、大汝少彦名の神の隠れ給へる岩屋なりと言ふ、祭神をばしづ権現と申すなり、こは正しく其里人の語る所なり、此所此歌を以て附會するやうなる所には有らず、いと深き山奥にてよそ人の知らぬ所なり、然れば志都の石室は是れにて、もしくは生石村主石見の國のつかさなどにて、彼國にて詠めるにや

と、宣長説を挙げている。志都の石室は石見国であると言っている。

る。志都の石室が石見国にあるという説は、宣長自身に拠るものではない。『略解』に書かれている其里の人の考えである。つまり、『玉勝間』の中に書かれている石見国出身の小篠御野の説である。ところで、『略解』には、三〇七番の歌との入れ違いについては何も指摘されていない。この問題は、『記伝』四十之巻で「皮すゝきは、三穂へ係れる枕詞なり」と宣長自身が解決している。

ただし、この枕詞からの解決方法も門人の影響を受けているかもしれない。それは、成瀬一三氏の調査報告に拠ると、鈴木胤の著した『離屋雜記』の一部「古学思問」という萬葉集覽書に、同様の説が書かれているという。氏の論文から引用する。

玉小琴説可_レ疑、ハタス、キハ下句三穂ノ枕詞トミユル、若三十三丁シヅノ石屋ト取カヘテハ枕詞ツムカズ、可_レ疑一也、この「古学思問」という書の成立年代は定かではなく、『記伝』四十之巻の宣長の考えが、直に鈴木胤の説を参考にしたと考えるのは短絡であるが注目すべき事実であらう。

春山之 開乃平為黒爾 春菜採 妹之白紐 見九四與四門

(巻八一 四二二)

『問目』では、第二句平為黒について、眞淵は次のように宣長に回答した。

開は「崎にて」、平為黒は「平鳥里也又」手鳥里の誤とすへし
(括弧内、元右傍書)

『略解』の宣長説は、

手鳥里の誤にて、開は崎の借字なるべし

とある。眞淵は、集中の例から平為黒の「為」は「鳥」の誤りであると考え、その後、手鳥里の誤りではないかとした。この眞淵の解答を宣長自身も認め、『略解』に紹介したものと思われる。

石見国浜田藩の国学者の影響を受けたものを次に挙げる。

百不足 山田道乎 浪雲乃 愛妻跡 —— 略 ——

(卷十三 三三七六)

『略解』に

宣長云、百不足は足日本と有りしが、字の亂れて下上に成れるより斯く誤れるなるべし

とある。『略解』では、簡略に宣長説として引用されている。『記伝』三十六之巻を見ると

彼、歌は、吾徒齊田清繩が考に、足日本なるを、日を百に、木を不に誤れるを、百不足を誤れる物と心得て、遂に足字を下に移したるなり、と云るぞ宜き

と『略解』よりも詳しく書かれており、『略解』に引用された説は門人齊田清繩のものであることが判明する。『記伝』三十六之巻は、淨書が寛政七年に完了している。『略解』卷十三に宣長が書き入れを行ったのは、寛政八十年までの間であることを考慮すると宣長は、門人齊田清繩から知り得た説をすぐに、千陰へ紹介したということになるだろう。

次は、『略解』とはほぼ同時進行していた『萬葉集東歌僻説評』から紹介された説を挙げる。

安豆左由美 須惠爾多麻末吉 可久須酒曾 宿奈莫那里爾思

於久乎可奴加奴

(卷十四 三四八七)

『略解』には、

宣長云、カクスズは如此為にて、俗にカクシイシイと言ふが如しと言へり

とある。

『問目』では、宣長は眞淵に、この可久須酒曾は、「如此為而ソ歟」と質問している。その他の主な書簡には、この部分に関する指摘がないので、この二つを比較するはかない。すると宣長自身の説が変更されたものだと思える。しかし、『萬葉集東歌僻説評』に

常雄云、如此為をそ也。コノ説ヨロシ

という一文が見出だせる。常雄とは、門人長谷川常雄であり、彼がこの考えを示唆していたことが判明する。

『萬葉集東歌僻説評』は、宣長の門人、稻掛大平が寛政九年(一七九七)に東歌についての考を宣長に問うたものである。その中の頭書には、「千陰方へモソノ如ク申ツカハシタリ」ということを見出すことができ、恐らく、ここから知り得た説を宣長が『略解』に書き入れていたのだろう。ちなみに『略解』卷十四に稻掛大平の説が五つも引かれているのは、その影響であろうと考えられる。

次に、天明二年(一七八二)に入門した土佐出身の人の説を紹介する。

烏玉 彼夢 見繼哉 袖乾日無 吾戀矣

(卷十二 二八四九)

第二句、彼夢を『略解』の中で次のように宣長は解説している。

彼は夜の誤にて、ヨルノイメニヲと訓むべし、

宮地春樹の著作『萬葉私考』⁽¹²⁾に

眞潮云。彼ハ夜ノ字ノ誤ニテ、ヌバタマノヨルノ夢ニモミエツ

グヤトヨムベクヤ(宋宣長翁云。御考イト宜シ訓ハイカド。

夜夢見繼哉ト訓ベシ。夢ハ古ヘハイメト云リ。ユメト云コトナシ。繼哉ハツゲヤト訓テ、ツゲト願フ意也)

とあり、『略解』所引の宣長説は、誤字を解明したのが谷眞潮であり、訓を施したのが宣長であることが、このことから知り得る。谷眞潮は土佐藩の儒者、秦山重遠の子で、延享四年(一七四七)二〇歳で眞淵に入門した。

四

大久保正氏は、『本居宣長の萬葉学』の中で、

「玉の小琴」等から引用せられた若干の説の外は、殆んどすべて宣長が稿本に書入れたものに據つたものであらうと思はれ、「玉の小琴」等に比して比較的晩年になる寛政年間の宣長の説が引用せられて居る譯で、その意味から略解の宣長説は注目すべき點を有している。

と述べている。従来から、萬葉研究者は、『略解』の宣長説に注目し、それを宣長説として注釈書に引用してきた。しかし、『略解』の宣長説と一言では言えない事情を持つものが在ることは、前述の如くである。

『略解』所引の宣長説には、歌を単位として六〇五歌に注があ

る。その多くは、大久保正氏の指摘のように、宣長の書き入れに拠るものと思われる。それらの書き入れは、どのような研究方法であるのだろうか。

第二章に挙げた歌を参考に考えて見ると、歌に付した番号でいう(1)や(3)の歌のような本文批判(訓点研究も含む)、(2)(4)のような語釈といったものが中心となっている。その他、民俗学的な見地から萬葉集を解明しようとしたものがある。例えば、二〇三番の第二句、安碁に対して『略解』に「近江の浅井郡の人の云く、其あたりにては、浅き雪をばユキと言ひ、深く一丈もつもの雪をばアハと言ふとなり」という注が見える。近江の浅井郡の人はまだ明確になっていないが、近江地方の方言から語釈を加えるといった方法を宣長はとっていたことがわかる。宣長の門人は、日本全国に広がっており、その点では、宣長は容易に方言・民俗等を知り得たであろう。宣長は、国語だけでなく、朝鮮語まで考慮して語釈を行っていた。これに関しては、『略解』所引の宣長説には見出だせないが、『宣長隨筆』⁽¹⁴⁾の記事から、このことが判明する。

『略解』所引の宣長説は、宣長の晩年の説を知る上で貴重な資料であることは言うまでもないが、その説は本文批判に偏重しているように思われる。例えば、卷十を見ると、宣長説は、四十五歌に引用されている。その内、本文批判が三十五歌、約七八%を占めている。他の巻も概ねこのような傾向である。幅広い見識の中で発展してきた宣長の萬葉学は、『略解』の中では、狭められた感があるが、これは『略解』編集において簡略化を旨としていた事情があったこ

とを考えれば、仕方のないことかもしれない。
『略解』所引の宣長説は、『記伝』等の資料にあたることによつて、更に詳しく理解できるであらうし、宣長の思考の変遷も見出だせると思われる。

注

- (1) 『本居宣長稿本全集第二輯』 一〇四頁
- (2) 『本居宣長全集第十七卷』 一六八頁
- (3) 『本居宣長全集第十四卷』所収 柴田常昭と宣長による問答録
- (4) 『本居宣長全集第六卷』所収 賀茂眞淵と宣長による問答録
- (5) 同巻所収、田中道麻呂と宣長による問答録
- (6) 『本居宣長全集第四卷』 三三五頁
- (7) 『同全集別巻二』 八四頁
- (8) 『本居宣長全集第六卷』 所収
- (9) 『本居宣長全集第十七卷』 七〇頁
- 一、小篠氏より参候紙包並書状御届被下、御世話 奉存候、石見 静窟ノ図御見せ被下辱、此度返上仕上候 此岩屋之事、先達 而段々小篠氏より申参承候處、いかさま故ある所とは聞え候 へ共、萬葉に有之候しつノ石屋へ、やはり播磨なるべく奉存 候也
- (10) 「国語と国文学」第十四卷第九号 鈴木離屋の萬葉集覽書 成瀬一三

成瀬氏によつて紹介された『離屋雜記』は、『國書総目録』に拠ると愛知県鶴舞図書館の蔵書であることが判明するが、図書館に問い合わせたところ、残念ながら戦災によって焼失したというこ

とであった。

- (11) 『本居宣長全集第六卷』 五一〇頁
- (12) 『日本古典全集』 一二九頁
- (13) 『賀茂眞淵全集第十七卷』 二四五頁
- (14) 『本居宣長全集第十三卷』 一二六頁、二八九頁に母を朝鮮語では オモと言う指摘が見られる。

以下に示したものは、『萬葉集略解』の中に書かれている宣長説を抜き出し、一覧表にしたものである。

凡例

- 一、一段目は、『萬葉集』の歌番号。但し、『萬葉集』の番号は、旧国歌大綱に拠る。
- 二、二段目は、『萬葉集略解』板本（安政三年刊）の丁数を記す。
- 三、三段目は、『玉勝間』のページ数。岩波書店刊日本思想大系『本居宣長』拠る。
- 四、四段目は、『古事記伝』のページ数。但し、同一の歌でも『略解』で解説している句と異なっている場合は採用していない。筑摩書房刊『本居宣長全集』第九・二〇・二一・二二巻を使用。○印の中の番号が、巻数である。
- 五、五段目は、『萬葉集玉の小琴』のページ数。筑摩書房刊『本居宣長全集』第六巻に拠る。
- 六、六段目は、『萬葉集問目』、『萬葉集問聞抄』、『萬葉集問答』、『萬葉集疑問』、『萬葉集答問』のページ数。筑摩書房刊『本居宣長全集』第六巻、第一四巻、別巻一に拠る。○印の中の数字が、巻数である。

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 玉の小琴	その他
一	一一一	一四ウ		⑩七二	一三	
〇七	二	五ウ				
一〇	一四	十一オ	六三	⑩八五	一四	
一六	一九	十五オ			一五	
一七	二一	十八ウ			一五	
二九	三二	二十オ			一六	
		二八ウ		⑪五四一 ⑫九〇		
		二九オ				
三四	三六	三一ウ		⑨四九〇		

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 の 小 琴	その他
三五	三七	三二才			一七	
三八	四〇	三五才			一八	
四三	四三	三七才				
五〇	五三	四五ウ				
〇五三	五五	四六才	三六七		六〇	⑥九〇
六〇	六〇	四七才		⑩四六七		⑭二二五
〇六二	六一	五十才		⑫二九三		⑭二三五
六六	六一	五一才			五九	
六七	六四	五三ウ			二〇	
七八	七一	五八才				
八一	七五	六一才	七七 七八		二一	
八二	七五	六一ウ				
追加						
二	七八	追加				
五三	七八	追加	三六七		六〇	五七
卷一						
九三	八四	二一七ウ		⑨二四八		
九九	八七	十才		⑪四〇九		
一〇九	九二	十三才				
一一三	九四	十四才	四〇九			
一二四	九五	十五才			一三	
一二六	九六	十五ウ		⑨二五六	二四	
一二三	九九	十八才				
〇二八	一〇二	二十才		⑪二二四		

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 玉の小琴	その他
一三一	一〇六	二二ウ			二五	
一四七	一一五	二九才		⑩四七五	二六	⑭三二九
一四九	一一七	三十才		⑨三七二	二六	
一五三	一一九	三一ウ			二七	⑥九二
一五八	一二三	三四才			六二	⑥九二
一六一	一二五	三六才		⑩三三五		
一六七	一三〇	三九ウ		⑩二五〇	二八	
一九三	一三二	四十才				
一九四	一四二	四一才				
一九六	一四三	四六才		⑪三二三		⑥九二
〇一九九	一四六	五十才				
	一四九	五二ウ				
	一五七	五八ウ		⑩一一八		⑥九三
二〇三	一五九	六十ウ			三三	
二〇五	一六一	六一ウ			三三	
二〇七	一六四	五三ウ			三四	
二二〇	一六六	六五才			三四	六四
二二七	一六七	六五ウ				
	一七〇	六八才				
	一七一	六九才				
二二八	一七二	六九ウ			三五	

歌番号		日本古典全集		略解板本		玉勝間		古事記伝		万葉集 玉の小琴		その他	
追加		一五五		一七五		七一才				⑥四八八			
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									
追加		一八二		七一才									

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 玉の小琴	その他
三五六	九	五ウ				
三六〇	一〇	六ウ				⑥三八四
三七〇	一五	九ウ				⑥三三七
三八五	二五	十五ウ		⑩二二七	四五	⑥二四六
三八七	二六	十七才			四六	
三八八	二八	十八才		⑩二五八	四七	⑥九五
三九一	三〇	十八ウ				
三九三	三一	十九ウ				
三九四	三一	二十才	一九一			
四〇五	三六	三二ウ			四八	
四〇六	三六	二三才			四九	⑥三三八
四一二	四〇	二五才			五二	
四二〇	四五	二九才				
四二一	四六	二九ウ				
四二二	四六	二九才				
四二六	四九	三一ウ		⑫六七	五一	
四三一	五二	三三ウ			五二	
四三九	五六	三四才				
四四三	五九	三六才				⑥三三九
四四八	六一	三八ウ				
四五八	六四	四十才		⑫三一一		
四六〇	六六	四一才		⑩二七七		⑥三八八
四七二	七一	四六才			六七	

卷四

[illegible]

卷五

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 の 小 琴	その他
六九〇	一七三	十一才				
六九七	一七五	十二ウ				⑭ 二六九
七〇五	一七八	十四才				⑭ 二六九
七〇六	一七八	十四才				
七〇七	一七九	十五才				
七一三	一八一	十六才				
七二四	一八五	十八ウ				⑥ 三七七
七三六	一八九	二一ウ				⑭ 二七一
七四〇	一九〇	二二才				⑭ 二七二
七四九	一九三	二四才				
七五〇	一九三	二四才				
七五四	一九四	二四才				
七五八	一九六	二五ウ				
七六四	一九九	二七ウ				⑭ 二七三
七七二	二〇〇	二八才				
七七九	二〇四	二九ウ				⑥ 二四三
七八五	二〇六	三十ウ				⑭ 二七四
七九四	二一四	五 一五ウ				
七九九	二二六	七才				⑭ 二七八
八〇〇	二二六	七ウ				
八〇四	二二八	九才				⑥ 二〇八
	二二三	十二ウ				二四四
				⑨ 四七五		
				⑨ 三一八		
				⑩ 二五六		
				⑨ 三一五		
				⑨ 四八七		
				⑩ 四四〇		
				⑩ 二四八		
						⑥ 二七〇

卷七

歌番号	日本古典全集	略解板本
九四八	二四	二十ウ
九五二	二七	二二オ
九六八	三四	二六ウ
九七七	四〇	三十オ
九七九	四一	三十ウ
九八六	四三	三二オ
九八九	四四	三二ウ
一〇〇七	五一	三七ウ
一〇二二	五六	四十オ
一〇二〇	六一	四三オ
一〇二二	六三	四四ウ
一〇三三	六四	四五オ
一〇三〇	六八	四七ウ
一〇三五	七一	四九オ
一〇四七	七七	五三オ
一〇五三	八一	五六オ
一〇五九	八四	五七ウ
一〇七八	九四	七―三ウ
一〇九四	九九	七オ
一一一〇	一〇五	十ウ
一一二三	一一〇	十三ウ
一二三三	一一四	十五ウ
一二三四	一二四	十五ウ

七―三ウ

三六七

玉勝間

古事記伝

⑪ 二九二

⑫ 二〇三

⑨ 一八六
⑨ 二〇六

⑪ 四二八

万葉集
玉の小琴

その他

一四

⑭ 二九五
⑭ 二九五

③ 三五三
⑥ 二一六
⑥ 二四九
⑭ 二九三

③ 三五三

⑥ 二四八

⑥ 二四七

③ 三五二

歌番号

日本古典全集

略解板本

玉勝間

古事記伝

万葉集
玉の小琴

その他

一三三七	一五	十六ウ
一二四二	一一七	十七ウ
一一八八	一三一	二五オ
一九九五	一三四	二六ウ
一二〇五	一三七	二八ウ
一二二	一三九	二九ウ
一二二八	一四一	三一オ
一二二五	一四三	三二オ
一二三九	一四五	三三オ
一二三一	一四六	三三ウ
一二三四	一四七	三四オ
一二三六	一四八	三四ウ
一二四九	一五三	三七オ
一二五七	一五六	三九オ
一二五八	一五六	三九オ
二二五九	一五七	三九ウ
〇二二六二	一五八	四十オ
二二六五	一六〇	四一オ
二二六六	一六〇	四一ウ
二二七二	一六三	四三オ
二二七三	一六三	四三ウ
二二七七	一六六	四四ウ
二二八一	一六六	四五ウ
〇二二八七	一七〇	四七オ
二二八九	一七一	四七ウ

四〇七

一四

⑩三二五

⑪二七四

⑪二四一

⑪二七三

⑪二〇一

⑩八二

⑭三〇〇
⑭三〇一
⑥二二〇
⑭三〇一
⑥二二〇

⑭二九九
⑥二二〇
⑭二九九
⑭三五四

⑥二五〇

⑥二一九

⑭二九六
⑥二一九
⑭三五四

⑭三五四

『萬葉集略解』の宣長説

卷八

一四二一	四一二	八一七才
一四二九	六六	九才
一四三〇	六六	九才
一四三八	九九	十ウ

三〇六	一七八	五一ウ
三〇八	一七九	五二オ
三一	一八一	五二ウ
三一九	一八四	五四オ
三六二	二〇〇	六二オ
三六三	二〇一	六三ウ
三七三	二〇四	六五ウ
三八五	二〇九	六八オ
三八九	二一一	六九オ
三九二	二二二	六九ウ
四〇三	二二六	七二オ
四〇五	二二七	七三オ
四〇八	二二八	七三オ
四一六	二三一	七四ウ

歌番号

日本古典全集

略解板本

玉勝間

古事記伝

万葉集
玉の小琴

その他

$$\begin{array}{ccccccc} \textcircled{6} & \underline{\underline{14}} & \underline{\underline{14}} & \textcircled{6} & \underline{\underline{14}} & \textcircled{6} & \\ \text{一一} & \text{一一} & \text{一一} & \text{一一} & \text{一一} & \text{五} & \\ \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \bigcirc & \text{一一} & \\ & & & & & & \\ \underline{\underline{14}} & & & \text{一一} & & \underline{\underline{14}} & \\ \text{一一} & & & \text{五} & & \text{一一} & \\ \bigcirc & & & & & \bigcirc & \\ \text{一一} & & & & & \text{一一} & \end{array}$$

14
三
〇
四

⑥

⑥ ⑥
 一一 一一
 二二 二二
 三三 三三
 ⑬
 三〇八

歌番号

日本古典全集

略解板本

玉勝間

古事記伝

万葉集
玉の小琴

その他

一四六〇	一九	十六才
一四六二	二〇	十七才
一四七〇	二三	十八ウ
一四七二	二四	十九ウ
一四七四	二六	二十ウ
一四九七	三三	二十四ウ
一五〇三	三六	二十六才
一五〇七	三八	二十七ウ
一五一七	四三	三十才
〇一五二〇	四五	三二才
一五三四	四九	三四才
一五三五	五〇	三四ウ
一五四六	五四	三七才
〇一五四七	五五	三七ウ
一五五七	五九	四十ウ
一五六二	六一	四一ウ
〇一五七六	六六	四四才
一五七八	六七	四四ウ
一五八二	六八	四五才
一五八九	七一	四六ウ
一五九二	七二	四七ウ
一六〇〇	七五	四九才
一六五三	九六	六一ウ

四二二

⑨ 四八四

⑩ 五三一

⑫ 二六七

⑭ 三二二

⑭ 三二一

⑥ 二二五

⑥ 二二六

⑥ 二二六

⑥ 二二六

⑥ 二二七

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

⑥ 二二八

四六八

⑭ 三一五

⑭ 四六九

卷九

歌番号

日本古典全集

略解板本

玉勝間

古事記伝

万葉集
の
小
琴

その他

一六五四

九七

六一ウ

一六七七

一〇五

九一五ウ

一六八三

一〇八

七オ

一六八九

一一一

八ウ

一六九六

一二三

九ウ

一七〇〇

一二五

十ウ

一七〇二

一二六

十一オ

一七〇三

一二六

十一オ

〇
一七三二

一二八

十七オ

一七三七

一二九

十八オ

一七三八

一三一

十九オ

一七四〇

一三三

二十ウ

四〇七

⑩
七九

⑩
二七九

⑫
一四五

⑫
三四六

⑪
三四五

⑭
三二八

⑭
三二八

⑭
三一九

⑥
三九五

⑭
三五九

⑭
三三〇

⑥
一五二

⑭
三六〇

⑭
三二二

⑭
三二二

⑭
三二二

⑭
三六〇

歌番号

日本古典全集

略解板本

玉勝間

古事記伝

万葉集
玉の小琴

その他

卷一〇

一七八七	一六六	四十ウ
一七九〇	一六八	四二才
一七九二	一七〇	四三才
一八〇一	一七七	四七才
一八〇九	一八五	五二才

⑪ 四八六

一八二九	一九五	十上	十六才
一八五九	二〇四		十一才

⑥ 二三九
⑭ 三三八
⑭ 三三三
⑭ 三三〇

⑥ ⑥
一四七 一四〇
⑭ 一二三二一

⑫ 七五
⑫ 一三四

⑥ 一四七
⑭ 三三四
⑭ 三三四
⑭ 三三一
⑭ 三三一
⑭ 三三五
⑭ 三六一

⑭ ⑭ ⑥ ⑧
 三三 三三 一四 二六
 八六 八六 八二 二二

玉勝間

古事記伝

万葉集
玉の小琴

その他

⑪ 四八九

⑥ 一四四 ⑭ 三四八

[illegible]

⑭
 三
 四
 一

⑭ ⑭
 三 三
 四 四
 一 〇

⑮
 三
 六
 一

⑥四八〇
⑭三三九
⑥一四九 二六二 三九一
四〇七 ⑭三三九

卷二

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 の 小 琴	その他
一二八四	六一	三四ウ				
一二〇二	六六	三七オ				
一二〇七	六八	三八ウ				⑭三五〇
一二一九	七三	四一オ				⑥三六五 ⑭三五一
一二二七	七六	四二オ				⑥一四五 ⑭三五一
一二四八	八四	四六ウ				
一二五五	八九	十七十三ウ				
〇二六六	九二	五オ				
一二六七	九四	七オ				⑥一五四 二七三 三六三
一二六九	九五	七ウ		⑫三五一		
一二七〇	九六	七ウ				
一二八四	一〇一	十オ				
一二〇〇	一〇七	十二ウ				⑥一五五
〇二四〇三	一〇八	十三オ	四一〇	⑪四一七		⑥二七四
一二〇六	一〇九	十四オ				⑥四五〇
一二一六	一一三	十五ウ				
〇二四一八	一一四	十六オ				
一二三五	一一二	十九ウ				⑥二七五
一二三八	一一三	二十オ				
一二四〇	一二四	二十ウ				⑥二七五
一二四七	一二七	二二オ				
一二五七	一三〇	二四オ				⑥二七六

歌番号

日本古典全集

略解板本

玉勝間

古事記伝

万葉集
玉の小琴

その他

一六七七 一二四
 一六九二 一二〇
 〇二六九六 一二一
 二七〇〇 一二三
 二七一二 一二七
 二七一五 一二九
 二七二〇 一三〇
 二七二一 一三一
 二七二三 一三二
 二七三二 一三六
 二七五四 一四四
 二七五八 一四六
 二七六七 一四九
 二七六八 一五〇
 二七七四 一五二
 二七八二 一五五
 二七八四 一五八
 二七九二 一六〇
 二七九八 一六〇
 二八三九 一六七

⑪四六九

卷二二

二八四九 六一四
 二八五三 六
 十二七十三ウ
 四ウ

⑩一三六

⑥二八三
 ⑥二六三
 ⑥二六三

⑥一六五

⑥三七一

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 玉の小琴	その他
三三二七	一四〇	六才	六ウ			
三三二九	一四一	七才		⑨三七二		
三三三〇	一四二	八才		⑩五〇一		
三三三四	一四六	十ウ	七四		⑩四六六	
三三三五	一四八	十一ウ	七四		⑪二四五	
三三三六	一五八	十六ウ				⑥一七八
三三三七	一五八	十八才				
三三三九	一六一	二十才				
三三七〇	一七一	二十九才				
三三七〇	一七五	三二ウ		⑫八九		
三三七六	一八一	三四才				
三三七八	一八三	三四ウ				
三三七九	一八四	四ウ		⑪四七二		
三三九五	一九六	六ウ				
三三〇〇	二〇〇	七ウ				
三三〇二	二〇一	七ウ				
三三〇三	二〇三	九才		⑫六九		
三三〇四	二〇四	十才				
三三〇五	二〇五	十三才				
三三一二	二二一	十六才				
三三二〇	二二六	十八才				
三三二四	二二九	二十才				
三三二七	二三六	二四ウ				⑥一八四
三三二九	二三八					⑥一八四 三〇四

59

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 玉の小琴	その他
三三三二	一三三二	二七才			⑥三〇四	
三三三三	一三三五	二九才				
三三三九	一三八	三一才			⑥一八六	
三三四三	一三九	三一ウ			⑥三〇五	
三三四六	二四三	三三ウ			⑥一八六	
三三五〇	七一二	十四上―三才			⑥三五一	
三三五三	四	四ウ				
三三五五	五	五才			⑥三五一	
三三五六	六	五ウ			⑥一九二	
三三五八	七	六ウ			⑥三五二	
三三六〇	八	七才			⑥三五二	
三三六一	九	八才			⑥三五二	
三三六七	一二	十才				
〇三三六八	一三	十ウ			⑥三五三	五〇七
三三七七	一七	十三ウ			⑥三五四	
三三八四	二〇	十六才			⑥三五五	
三三八五	二〇	十六才				
三三八八	二二	十七才				
三三九二	二三	十八ウ			⑥三五六	
三三九三	二三	十九才			⑥三五六	五〇八
三三九四	二四	十九才				
三三九六	二五	二十才			⑥三六六	
三四一〇	三一	二十四ウ				

歌番号

日本古典全集

略解板本

玉勝間

古事記伝

万葉集
玉の小琴

その他

三四二四	三六	二八ウ	
三四二六	三七	二九ウ	
三四四二	四五	三五才	
○三四四六	四七	三六才	
○三四四七	四九	三六ウ	
三四五一	五六	三八ウ	
三四六八	五六	十四下—五ウ	
三四七六	六〇	八才	
三四七八	六一	八ウ	
三四八〇	六二	九ウ	
三四八四	六四	十一才	
三四八六	六五	十一ウ	
三四八七	六五	十二才	
三四八八	六六	十三才	
三四九三	六八	十四才	
三四九五	六九	十五才	
三四九九	七一	十六ウ	
三五〇二	七三	十八才	
三五〇六	七五	十九才	
三五二三	八一	二四ウ	
三五二五	八二	二五才	
三五三三	八六	二七ウ	
三五三六	八七	二八ウ	
○三五三八	八八	二九ウ	

⑪四六
⑩四三一⑪五〇一
⑪四八三

⑥四七九

⑥三六一
四四二

⑧三六二

⑧三六三

⑧三六五

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 玉の小琴	その他
三五五二	九四	三三ウ				
三五五三	九五	三四オ				
三五五六	九六	三五オ				
三五五七	九六	三五ウ				
三五五九	九七	三六オ				
三五六二	九九	三七ウ				
三五七三	一〇三	四十ウ				
卷一五						
三六〇三	一一四	十五―九オ				
三六二七	一二三	十六ウ				
三六三八	一二五	十八オ				
三六八二	一二八	二十ウ				
三七〇〇	一四一	三十オ				
三七二二	一四八	三六オ				
三七六五	一五一	三八ウ				
三七八九	一六五	五十オ				
三七九一	一七三	十六―四オ				
卷一六						
	一七六	六ウ				
	一七七	七オ				
	一七九	八オ				
	一八〇	九オ				
	一八一	九ウ				
	一八五	十二オ				
			一九二			
				⑩ 三二〇		
				⑪ 五一六		
				⑫ 三二一		
					⑥ 二〇四 一二五	
						⑥ 二〇一 三六六

卷一九

四二二五	四二二〇	四二一七	四二〇八	四二〇七	四〇一六	四〇九六	四〇八二	四〇五九
五四	五〇	四八	四一	四〇	三九	三三	二〇	八一〇
四四才	四十ウ	三九ウ	三三ウ	三三ウ	三二才	二八才	十八才	十八十ウ

⑪ 一四五

⑥ 二二六

卷一八

四〇二四	四〇〇〇	三九九一	三九七三	三九六九	三九五六	三九四六	〇三九四一	三九三三	三九二一	三九〇五
三三七	三三一	三〇五	二九三	二九二	三八六	二七七	二七三	二六九	二六二	二五六
四才	十二ウ	十八ウ	十七下	三ウ	三才	二二才	十九ウ	十七ウ	十二才	十七上

⑥ 二二三
⑥ 二二二

⑥ 三三二

⑥ 二二一
三三二

⑥ 二二一

卷一七

歌番号

日本古典全集

略解板本

玉勝間

古事記伝

万葉集
の
小
琴そ
の
他

卷二〇

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 玉の小琴	その他
四一四八	六七	十九上六ウ				
四一六三	七五	十二ウ		⑫二五〇		⑥三二九
四一六六	七八	十四ウ				
四一六九	八〇	十六オ		⑪五四四		
四一七〇	八一	十六ウ				
四一七二	八一	十七オ				
四一七四	八二	十七ウ				⑥三二七
四一八九	九一	二三ウ				⑥三三一
四一九二	九三	二五オ	四二二			⑥二二八
四二〇五	九八	二九オ				⑥二二九
四二〇七	一〇〇	三十オ				
四二三五	一二五	十九下八ウ		⑨三二四		⑥二一九
四二四一	一一九	十一オ				⑥二一九
四二四二	一一九	十一ウ				
四二四八	一二三	十四オ				
〇四二五一	一二五	十五オ		⑨二五五		⑥二二九
四二五四	一二七	十六ウ				⑥二二〇
四二六五	一三三	二一オ		⑪三九二		⑥三三四
四二六六	一三五	二二ウ				
四二七四	一三九	二五オ				
四二七六	一四〇	二六オ		⑩三九		
四二八〇	一四二	二七ウ		⑪二八三		
四二八八	一四五	二九ウ				⑥四三一

歌番号	日本古典全集	略解板本	玉勝間	古事記伝	万葉集 玉の小琴	その他
四二九三	一四九	二十上—五ウ				
四二九四	一五〇	五ウ				⑥三三六
四三二九	一六三	十六ウ				
四三三九	一六八	二十ウ				⑥三二一 三三八
四三四一	一七〇	二一ウ				
四三七二	一八三	三二ウ				
四三七四	一八五	三四オ				⑥三二一
四三八二	一八九	三六ウ				
四三九一	一九五	四十ウ				
四四一三	二〇六	二十下—一オ		⑩二五八		
〇四四二〇	二〇九	三ウ				
四四三〇	二二三	七オ				
四四三七	二二七	九ウ				
四四四六	二二〇	十二ウ	三七二			
四四四九	二二一	十三ウ				
四四六〇	二二七	十八オ		⑨二〇九		⑥三二三 三四二
四四六五	一三〇	二一ウ				
四四七〇	一三三	二四オ				
四五一〇	一五一	三七ウ		⑩二〇九		
四五一四	一五三	三九ウ				

活字本と板本（安政三年刊）の校合によって判明した宣長説の誤りを以下に記す。（ ）内は歌番号を示す。

正誤表

誤 ↓ 正

- a. 例へば一つ田を三つに分けて、一ハカ二ハカと立てて↓一ハカ二ハカ三ハカと立てて（五二二）
- b. 然らばテニフレズトモと訓むべし。↓テニハフレズトモと訓むべし。（五七七）
- c. イヌルは往ヌナルなり。↓イヌナルは往ヌナルなり。（八二七）
- d. 思而二字は男の誤にて、↓思而二字は男の字の誤にて、（二七五八）
- e. タナシレならんと宣長言へり。↓タナシレならんと宣長言へり。（三二七九）
- f. コナラは、木櫛なりと言へり。↓コナラは、木桶なりと言へり。（三四二四）
- g. モテハヤサモ、モテハヤサモと訓まんと言へり。↓モテハヤサモ、モテハヤサモサモと訓まんと言へり。（三八八六）
- h. 葉非左思は誤字なるべしと言へり。↓葉非左思は誤字なるべしと言へり。（三八八九）
- i. さて初句は二の句の上へ移して心得べし。↓さて初句は三の句の上へ移して心得べし。（四三八二）